

演題 6. 慢性咳嗽の診断における呼気ガスNO測定の有用性について

○藤代洋子 石毛久恵 高橋英則（国保旭中央病院）
芹澤智行 岩本逸夫（国保旭中央病院内科）

【目的】慢性咳嗽の原因を正しく把握して鑑別診断することは、喘息の早期診断・治療に重要である。近年、気道・肺の炎症を評価する方法が行われるようになり、その中でも一酸化窒素（以下NO）が最も一般的に実施されている。

当院では2007年7月より呼気ガス分析NO測定装置 Sievers280 i が導入、内科外来の患者を対象として測定を開始した。今回、慢性咳嗽で内科外来を受診し、スパイロメリーとNO濃度測定を実施した患者について、NO濃度測定の有用性について検討したので報告する。

【対象および方法】2007年7～10月まで2～3週間続く咳嗽を主訴として、当院内科を受診した26名を対象とした。また、基礎疾患がなく、スパイロメリーも正常なパターンを示した健常者18名にNO濃度測定を実施した。

慢性咳嗽患者と健常者のNO濃度、慢性咳嗽のスパイロメリーの%予測1秒量の低下している群と正常群のNO濃度、さらに喫煙の有無のNO濃度について検討した。

【結果】1) 呼気NO濃度は慢性咳嗽患者では 28.7 ± 41.0 ppb（平均±SD）と健常者 19.8 ± 5.4 ppbに比べて高値を示した。2) 慢性咳嗽患者で%予測80%以上（22名）では 41.4 ± 40.5 ppb、80%未満（4名）では 38.9 ± 8.5 ppbと有意差は見られなかった。しかし、30.6ppb（健常者平均+2SD）を高値と判断すると、%予測1秒量80%以上の者でも50%（22名中11名）が高値を示した。

【まとめ】慢性咳嗽の鑑別診断のためには呼気ガスNO測定は簡便で有用な検査の1つと考えられた。

連絡先 0479-63-8111（内線4255）